

絵本と子どものイメージ (二)



清水エミ子

「このところにおうちがあれば、おおかみがきててもワニがきてもだいじょうぶなんだのに。えをかく人は、どうぶつのいるもりのなかは、どんなにたいへんなのかしらないんだね。」

もりのなかのきで、うちや、かくれがをつくってあげなくちやかわいそうだな」

「このとりみてごらんよ。わらってるじゃないか。こつちに、ともだちがいるからよろこんでる」

「このくも、すてき、ジェットキが、なかにはいって、とんでるくらいおおきいね」

「このにわどりのおかあさん、あたしんちのおかあさんににてるわよ。だってね、ほら、こまってるでしょう。ひよこがきかんぼだから、きょうだいげんかしたり、いたずらしたりするからね」

「みんなでなかよくあそんでいてね、あしたになったの。あしたになつてね、また、あそびましょつて、このスズメがきたの。なにやろうか、つていってね、そばのとりをみたの。」

おにごっこやろうか、つていったの。そしたら、みんなのやだよ。ぼく、やーめた、つていっちゃったの。そいで、みんなもやめて、かえっちゃったの。そいでまたあしたあそぼう、つてきたの……」

このように、絵本をたのしむふんい気、絵本をみて友だちとはなしあうおもしろさやたのしさが、全体に広がつてくると、

「あんたこれ、なにしてるんだとおもう。あたしは、なかまをよぼうとしてるんだとおもうな」

「これは、もつとほんとはおおきいんだよね。でも、とおくのほうにあるから、そいでえにかくからちいさくかいてるんだね」

と、自然のすがたで絵をみてたのしんでいるようすが、そこにみられるようになって来ました。

・しかし、まだまだ具体的にしかみられない。

・部分だけを、みつめてしまいがちの子どもが多い。

・自分の生活にたらしあわせてしか、よみとれない子どもたちが多い、という状態です。

◎これらのようすをもう少し大まかにがめてみると、

①絵の話から、あまり発展していかない。

・描かれているものの説明で終わってしまう。

・描かれているものからの発展はないが、そのものを非常に忠実に読みとっている。

◎話が絵からはなれてしまったところで発展してしまっている。

・絵とかげはなれてしまったところで話が展開している。

・絵を自分勝手に（自分の生活にむりに結びつけて）解釈して話を運んでしまっている、などの状態がみうけられたのです。

①の「・描かれているものの説明で終わる」の例

「これはね、いぬなの、いぬのおかあさんがいてね」

「そいで、これが、こどもなの」

「さんぽにでかけていったの、はらっぱに」

「そしたら、ちょうちょうがとんできたの」

「そいで、いぬをみていたんだよ」

①の「・描かれているものを忠実に読みとる」の例

「いぬのこどもが、おかあさんとさんぽにでかけていったの」

「こどものいぬがよろこんでちょこちょこあるいていった」

「ちょうちょうがとんできてみているの」

「いっしょにいこうっていった」

「そしたら、のはらのはらっぱが、よろこんでまわったの」

「あおいはらっぱや きみどりのはらっぱのあるはらっぱにいったの。みんなでいっしょうけんめいあるいてね」

というように、非常に忠実に絵の説明をはじめてしまうのです。

◎①の「・絵とかげはなれてしまったところで話が展開してしまっている」の例

「いぬのおやこが、いぬのこうえんにあそびにきたの」

「そこにヘリコプターがいたのね」

「ヘリコプター、どこかへつれてって、っていぬがいったの」

「ヘリコプターはだめですよ。これからたたかいにいくからっていったの」

「たたかいにいって、てつだってあげます」

「それでヘリコプターにのって、たたかいにいきました」

「それは、かいじゅうとのたたかいです」

と、とんでもないところで話をたのしんでしまっています。

◎②の「・絵を自分の生活に結びつけて話を発展させてしまっている」の例（自分たちの望みを話す）

「おかあさんいぬが、『きょうは、おたんじょうびだからどこかにつれていってあげましょう』っていって、こどもたちをつれていったの」

「おたんじょうびのケーキをかいにいきました」

「おたんじょうびのおもちやもかってね、ってこいぬのいちばんちびがいったの」

「だめよ、こないだのたんじょうびに、おもちやだったから、きょうはケーキだけよ」

「やだよだよって、だだをこねました」

「おかあさんは、そんな、わからないこはいけませんといっておしりをベンベンぶちました」

「こいぬはごめんなさいっていってケーキがまんしました」

「おとうさんが、かいしゃからかえてきてから、ケーキに一口ソクをつけて、たべました」

といったように自分の望みや生活にくっつけないと話が進んでいかない子どもたちと、同じ一枚の絵でも、子どもたちは、このようにいろいろに読みとるので。

いろいろな読みとっている中で、私はいろいろのことがらに気づきました。

・一枚の絵の中での主題の読みとりを、保育者が正しくしてから絵を与えなくては、絵を読みとっていく中で、適当な助言ができないということを感じた。

・絵が語りかけているものを正しく全員につかみとらせなくてはいけない。

・絵の主題を集団の中でつかみとらせなくてはいけない。

・ある、共通のつかみ取らせかたがあるのではないだろうか、子どもたちのさまざまな読み取りを目のあたりにみて、つくづくと感じさせられたのです。

犬のはなし、という共通さではなく、犬が、どうやって（あそんで）どんなことを感じたか（なかよくして、よろこんだ）、というような内容というか、中身をつかみとる共通さでなくてはいけないのではないかと思うのです。

中身をつかみとることによって、文学的な情操も育ってくるし、生活を、そしてすべてのことがらを、感じる心が育ってくるのではないのでしょうか。こんな心が育つことによって、よろこびを素直に感じ、感動することをたのしめる子になっていくのだと思うのです。

こんなふうに考えながら、子どもたちに与える、絵のえらびを保育者がすることにしました。

今まで気づかなかった子どもたちの絵に、あまりにも、いろいろなスタイル、いろいろな表現のしかたがあるのに気付いたのです。子どもの心を育てることを忘れた、おとなの考えが先行しすぎてしまっている絵、

・おとなが画面で、たのしみすぎてしまっている絵、

おとなにしかわからない美しさをつかいすぎてしまっている絵などが、あまりにも多いことにおどろかされました。

まず、保育者である私たちが、もっともつと幼児の心になって、たくさん絵をみるのが、どんなにか大切であることを知らされたのです。しかし、こんなに、いろいろと絵のある生活のできる子どもたちが、非常にうらやましくさえ思いました。

こんな豊かな絵の中で生活を、むだなく子どもたちにつかみ取らせるための努力をしなくては、とてももつたないと思ひ、気ばかりあせってしまうのです。

そこで私は、もつともつと自然の状態での子どもと絵、子どもと絵本との関係をながめなくては、方法が生まれてこないことに気づいたのです。

子どもと絵や、絵本の関係の中のひとつに、子どもたちは、自分でいろいろ感じたり、気づいたりしたことを絵に描くことはできない。しかし、子どもたちは、どんな絵でも、見ることはできるのだということを、今さらのように気づきだから、よいものを与えなくてはいけない、よい絵を發達に即してひとりひとりの能力に適したものを与えていかななくてはいけないのではないかと思ひました。

じつと一枚のマンガを見ていて、字が読めなくても、「かわいそうだね」とか「バカみたい」「よせばいいのに」と、みている子がいます。

また、必要でないものは、子どもたちは、画面からみようとしないことが、はっきりわかったのです。

・画家があまり重要視していない部分は、子どもたちも素通りしている。

季節を出そうとして、草花をそえすぎたり、主人公以外に、あまりにも多くの登場物があると、それらは素通りしてしまうようです。その反面、画家が、あまり重要に考えていない物にまで、大へんな意味をみつけて、絵読みをしていくこともあります。

「ここにおちていたいが、『こっちはすよ、むこうへいくとまよってしまいますよ』っていっしょうけんめいおしえたの」

「くまは、わかれみちにきたとき、どっちにしようかって、こまったの」

「もしたら、このいしがね『こっちはいいよ、こっちにしなきいって』おしえてくれて、わるものいいない、いいみちをとおつて、なかよしのどうぶつのいるひろばにいったの」

と、道路の片すみに、ひとつふたつかきそえた石ころが、話を、絵をふくらませ、發展させてくれているのです。

「ここにぼつんとあるものね、これがうちゅうのでんばをあつめておくところなんだよ」

「それで、このそばにきたら、10キロぐらいそばにきたら、バクハツするのね」

絵かきさんが、もしかしたら、絵ふでの絵の具を、ポトンとた

らしたような、一つの点にまでも、いろいろなことを想像することをたのしむのです。

それだけに、絵の選びかたがむずかしくなってきましたが、あまり、むずかしさにこわがっていないでいろいろなものを与えてみて、どんなものが、どんな子どもたちに訴えるのかを、こくめいにきぐってみたいくなります。

◎一枚の絵を見て、グループで話にまとめていくことをたのしみましたので、四、五名のグループで、絵を交換しながら、絵読みをしてみました。

一枚の絵だけでなく、二、三枚組になっている絵も与えてみました。

一枚目（広びろとした野原に、ひよこがちらばっている絵）

「にわたりのおかあさんが、はらっぱに、ひよこをつれていて、あそばせていたの」

「むしをみつたり、はっぱをみつけてたべていました」

「ひよこたちは、けんかをしたり、おにごっこや、かくれんぼをしてあそんだの」

「おかあさんのにわたりは、にこにこして見ていたのね」

二枚目（バックが、夕やけのような色でぬってある）

「もうゆうがたになったから、かえりましようよ」

「またあした、つれてきてあげましようね、っていったの」

「まだあそんでるの、かえるのやだやだってだだこねたの」

「でもだんだん、ゆうやけになってきたから、おかあさんがあそびだして、そのあとをひよこがついていったの」

三枚目（木の上で、たかが、ひよこをみている絵、まっかなバックおそろしく感じる）

「とちゅうでひがくれて、よるになっちゃったの」

「それで、おかあさんのおなのなかで、ねることにしたの」

「よなかに、ガサゴソっておとがするから、おかあさんのにわたりが、めをきましてみると、きのうえに、たかがとまってこつちをみているの」

「おいしそうなひよこだ、こんばん、ごはんをたべてないから、いただくことにしよう、といって、いまにもたべようとしていました」

「にわたりのおかあさんは、たかにきづかれぬように、ひよこをおこしたの」

「おきなさい、おそろしいかがあるから、そっとそっとにげましよう」

「おとがしないように、たかがよそをむいているうちに、にげるのよ、とおこして、そっとそっとにげました」

四枚目

「あさがきたの、よかったねよかったね、ってひよこたちは、よろこんであそんだの」という話なのです。

これと同じ絵を、他のグループは、

「おつかいのかえりによるになって、もりにねたの」

「そしたら、わしがバサッとはねのおとをさせたので、にわたりたちは、めをさまして、おきだしてにげたの」

「そして、あきに、のほらについて、おひさまが、はっぱやむしのあきごはんをくれて」

「みんなで、おいしい、おいしいってたべたの」と、いうように、部分的なちがいは、はっきりしているのです。が、

どうしても、ぬかしてはいけないことがら、どの子どもそのことを読みとらなくてはいけないことがら、この絵の場合は、ひよこの親子が、夜を野原で明かすこと、たか（わし）におそわれそうになること、お母さんのおかげで、たべられなくて、にげられたこと、これらのことがらは、どこのグループの話の中にもものつていたのです。

絵のもつ内容を、子どもたちが、表現を、いろいろに変えても、ぬかしても友だちにおこられてしまうのです。ぬかすことができなことがらがあることがわかったのです。

どうしてもぬかしてはいけないことがらは、何回くりかえしても、取り入れられているのです。このことがらを全員によりとらせることが、絵本指導の忘れてはならないことがらであり、保育者が指導し、助言しなくてはならないことがらだと思ふのです。

はなしをくりかえしているとき、一回目と二回目との話では、部分的に、そして表現のしかたは、そのつどつどかわってしまふ

ということも、はっきりわかったのです。しかし、前にも述べたように、どうしても動かすことのできない、絵のもつ内容は、何度くりかえしても、変わっていないことがわかったのです。

それをぬかしたり、変えたりすると、

「ちがうでしょう、たかがねらうのよ」

「わしにみつきりそうになるのよ」と、友だちから、聞いている子どもたちから、しかられているのです。

もっともつといろいろな絵で、子どもたちといっしょに、絵読みをつづけていき、子どもたちの中に内在しているものを、引き出す手助けをしたいと、つくづく考えるのです。

幼児教育講習会

日時 昭和四四年七月二二（火）～二五（金）日

午前の部 九、〇〇——一二、〇〇

午後の部 一、〇〇——四、〇〇

会場 お茶の水女子大学講堂・体育館

主催 お茶の水女子大学附属幼稚園内

日本幼稚園協会